

育教の兒幼

月一十年二十和昭

この秋

倉橋惣三

この秋は常の秋ではない。だが、けふの空のなんまきれいに澄んでゐるこゝか。子ども達は、暖い日光に可愛いらしい頬を紅潮させて、嬉々として遊んでゐる。朗かな笑ひ聲は幼稚園の庭一ぱいに擴がつてゐる。私の胸には、なんだか込みあげて來た。あゝ、有り難いこゝだ。

○

この保育期の初めから、幼稚園の山の上に、毎日國旗を立てるこゝにした。各組の幼兒が當番まいつた順で、受持の先生につれられて、主事室の國旗をもつて山へ上つて行つて、綱に結びつけて、きりくく、ま曳き揚げるのである。旗竿は太い檜の丸材で六間餘り、朝風に揺られながら段々に昇つてゆく國旗は、その竿頭でばつみ翻る。子ども達にまつては、ぐつみ胸を張つて、頭上に打ち仰ぐ高さである。

その國旗掲揚の第一日、幼兒達をその下に圓く集めて、「日本の旗 日の丸の旗」を

合唱した。その時、小松耕輔氏が、その作曲者として特にコンダクトを振つて下さつたことは、私達はもとより、子ども達を一段と喜ばせた。

につぼんのはた ひのまるのはた

たかくたてよ たかくたてよ

あさひのいろを あかくそめて

あかるいそらに ひらくくくき

かやくひかり ひのまるのはた

につぼんのはた ひのまるのはた

たかくたてよ たかくたてよ

小松氏の作曲は、私の歌には勿體ない程立派なものだ。豫て組々で先生方に教へられて、立派に唱つて呉れた幼児の齊唱も、私の歌には勿體ない程いゝ出来だつた。

「今、日本の兵隊さん達は、支那に行つて戦をしてるて呉れますね。みんな日本の國のためですね、天皇陛下の御ため、國のために戦つてゐるのですね。強い。強い。ほんきに強いのですね。その強い兵隊さんに、ぐんぐん勝つて貰ひませうね。此の日の丸の旗を見上げてゐるを、兵隊さん達の強いこゝが思はれて來ますね。そうして、日本帝國萬歳を、大きな聲でいひたくなつて來ますね。……」

私は、こういつて幼児達に話した。

○

保育室を歩いて見るに、この室にも、紙製の軍用帽と防毒マスクが置いてある。ある室には、事變ニュースの寫眞が大きく貼つてあつたり、大きさはなりに色分けにした日支地圖が貼つてあつたり、絲を引き渡して紙製飛行機が幾つも／＼かけてあつたり、机の上の青色紙を海を見たて、紙製軍艦が澤山列べてあつたり、流石に事變氣分が漲つてゐる。そういへば主事室にも、特に海軍省から貰つた大きな支那地圖が二枚壁一ぱいに貼つてある。――斯うした中で、幼児と先生との間に、又、幼児達の中に、事變に就ての話が豊富に行はれてゐることは言ふまでもない。幼児達の中に、戦争遊びの盛に行はれ、先生も屢々それに應召されてゐることも言ふまでもない。

が、しかし、私達、この中で一つのことは氣をつけてゐる。支那といふ國そのものを敵として印象させないこと、殊に、支那人そのものを憎むような氣持を煽りたてないこと、之れだけは注意してゐる。勿論、そうしたことを特に正面から言ひきかせたりするのではないが、そんな方へ幼児達を向けないように、若し、そういう傾向が見られたら向けなほす方がよからうと話してゐる。

○

非常時が、非常時として、常時は異つた力を教育に與へて來ることは勿論である。子ども達の心にも、子ども達相應に、國家意識が強められるであらうこと、全國民の生活緊張の中に、氣持の緊張が、幼い心にも與へられるであらうこと、それ等は當然のことであり、又そう導かなくてはならぬことでもある。しかも、私達は、自分達が如何に非常の生活をする時であつても、幼い子ども達には、常の生活としての重要なものを失はせないようにしなくてはならない。非常時を、

子も達の教育の上に積極的ならしめることが大切であると共に、消極的ならしめることからは、つぎめて、幼いものを護らなければなるまい。大人は何を食つても、幼いものゝ榮養は減じてはならぬ。大人はどんなに忙しく働いても、幼いものゝ遊びを奪つてはならぬ。大人は如何に嚴肅であつても、幼いものから笑顔を失はせてはならぬ。非常時には非常時の教育があると共に、子も達の教育の常なるものは、忘れてはならず忘つてはならぬ。

この秋の幼稚園の庭に、一ぱいに擴つてゐる幼児達の嬉々たる幸福を見て、有り難いことだと思つたのも、この點であつた。

○

この幼稚にもさいふ譯ではないが、幼稚園にも出征將士の子がゐるのである。國からは、さいふ場合、事情に従つては保育料を免するようによこの通課も出されてゐるが、さいふ取扱ひの有無に拘はらず、幼稚園としては一段の意を用ゐて、父の出征中の子を護らなければならない。實際に於てさいふ途が必要であるかは同一でない。又、必ずしも、大切な大切を愛撫するのがいふ譯では決してないであらう。しかし、家庭を協力を一層密にして、必要な「家庭教育の補ひ」がそれなくあるでもあらう。殊に、御國のために父の留守の子である。必要さいふ事情の有無に拘はらず、先生の情の籠るは自然であらう。「毎日幼稚園で變りなく楽しく、元氣にいたして居ます」さいふ一行は、出征せる父への、どんな大きな慰問になることであらう。